

子どもたちと未来をつくっていくための 雑誌として

田代和美



『幼児の教育』の編集にかかり始めた当初の記憶として懐かしさと共に思い出されるのは、お茶の水女子大学附属幼稚園の先生方と一緒に編集会議ともおしゃべりともつかぬ時間を過ごした西日の当たる本田先生の研究室である。学外の方からは本田先生の研究室の大学院生と間違えられることもあったほど、私は心もとなさを身にまとひながら、話を聞くのをただ楽しんで過ごしていたように思う。『幼児の教育』を初めて手にして第一巻から読み始めたころの、古い本独特のほこりとかびが混ざったようにおいと、ほこりまみれの手も懐かしく思い出される。

自分がバトンを辛うじてつなげられた期間については、編集を担つてくださった仲明子さんを抜きには語れない。二人三脚で歩んできた九年間だった。常に六ヶ月分

の編集作業が動いていたので、ほぼ毎日、二人で何かしらの打ち合わせや相談をしていた九年間だった。編集委員の附属幼稚園の先生方は、それぞれに独特のカラーと柔らかくみずみずしい感性をもち、また幅広い人脈をもつていて、保育の現場のみならず、保育に連なるさまざまな世界との架け橋を渡す上で力を發揮してくださった。長年にわたって挿絵を描いてくださった彌永たたえさん。表紙を描いてくださった方々。そして採算を度外視してくださり続けたフレーベル館の方々。多くの方々の力があつて何とか続けられたことに感謝している。

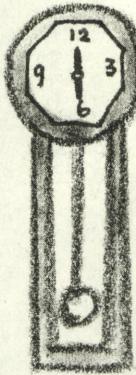
保育の場で繰り広げられる出来事は、保育の世界で仕事を始めた時期の私にとつてこの上なく興味深いものだった。現場の保育者が実践を振り返りながら丁寧に言葉を紡いだ文章を読むことが、編集に携わる者としては何よりも楽しみであり、それらの文章は雑誌の核だった。当時、附属幼稚園の先生方と一緒に子どもたちのことを語り合つ時間ももてるようになつたきつかけも『幼児の教育』の編集に携わったことに端を発していたと思う。現場の先生方と子どものことを語り合う時間は私にとつて最大の楽しみであり、刺激であり、学びであり、その後の自分の仕事の方向に大きな影響を与えてもらつた。とどまることなく動いている保育の場での事象を言葉にすくつて語つたり、文章としてとどめたその中に、それぞれの人のストーリーがあつた。それらのストーリーに触れることを通して、「明日」は子どもたちと一緒に新しく生み出せるのだという希望を感じ取っていた。

『幼児の教育』も、保育の場と同様に、私にとつては生き物のように動いているものだつた。保育雑誌である以上、当然、保育を核として編集していたのだが、「幼児の教育」と称してはいても、その中では保育の世界での事象と保育の外の世界での事象が常に、図と地の関係のように揺れ動いていた。保育の世界が図になり始めるとき、その方向に集約していくのだが、集約していくと私たちにブレークがかかり、外の世界に目が向かい始める。保育の外の世界に目を向け始めると、一見保育とは関係がないかのように見える世界が図になつて、これが保育雑誌なのかと思うような構成になり、またブレークがかかる。核に集約していくと外を向き、外を向き過ぎると核に集約しようとする。それを繰り返していたようと思う。雑誌の編集方針の一つとして「幼稚園の先生としての根本問題で、遠く保育に関係があつて保母にふわりとした感じを與える記事を入れる。この場合、心理学者ではなく、社会の各方面の人を取り入れる」という倉橋先生から津守先生が引き継いだ方針があつたことが、この揺れ動きに影響していたのだと思うが、必ずしもふわりとした感じを與える記事でもなかつたようにも思う。思えばこの揺れ動きを今も繰り返している自分がいる。子どもたちが未来に向かつて人としてよりよく育つてほしいと願いながら、自分が子どもや大人とかかわる時の、子どもたちにとつてのよりよさとは何かを求めて。

今から十年前、第一〇〇巻を迎えた年に、先代・先々代の発行人である本田先生と津守先生をお迎えして、これまでの『幼児の教育』にまつわる話を伺う機会を得た

(『幼児の教育』第一〇〇巻第四号)。その中で津守先生は「今、この現代を考えてみると、子どもが変わったかどうかっていうよりも、社会全体がひっくりかえっちゃつてるね。……中略……戦前から戦中戦後つて引きずっと何かがあると思うんですよ。それが今こここのところで、全部ひっくりかえっている」と述べ、それを受けて本田先生は「すばっと切れたんですね。違うものがすばんと入ってきた」と述べた。この時には、それでも幼児教育は、状況の変化の中で、一番基本的には変わらないで、一番大切なものを培える場所なのではないかという話になつた。それに違はないと思うが、しかしこの十年間にも加速度的に子どもを取り巻く状況は変化し続けている。人が生活を営む大前提が変わり続けている。生活の中心が消費になり、消費の対象が付加価値になり、付加価値は求めても限界がなく……常に先々を追いかけて、「今ここ」が大切にされない時間が流れている。そのような時間の流れに子どもたちをうまく乗せていくことが子どもたちを育てることだとは思えないが、しかし現にそのような時間の流れの中で子どもたちは日々生活しているという、育てる側の人間としてのジレンマを感じる。

現在、私は巡回相談という形で保育の場に伺い、保育者と語り合う場をもち続けているが、幼児が幼児としての時間を生きることを保障してもらえないなりつつあることを肌で感じてい



る。一つひとつの物事とゆつくり触れ合つて確かめたり、身体でおしゃべりしたりする経験を積むことなく、張りぼてのようく外側に言葉が張り付いていたり、視覚ばかりを使つてしたり。人が育つていくスピードは消費生活のスピードのように早々には変わらない。いずれ人として備わつているさまざまな能力のうちで使われない力が自然淘汰されていくのかもしれないが、それは進化の過程でかなりの時間をかけて緩やかに進行していくものだろう。人の育ちの過程が十年二十年単位では変化しないのだとすれば、乳幼児期の成長のプロセスをまさに身の丈に合わせて経ていく時間と経験の場を守つてあげたい。まさに保育の「真は新」であることを確固として死守したいと思う。しかし死守の仕方を工夫しないと、保育の世界が外の世界と通行不可能な隔絶された世界になつてしまふのではないか。「子どものため」を前面に出すことでも、逆に子どもの存在が疎まれはしないかと危惧する私がいる。効率とは無関係な子どもの時間を生きることが、いかに土台として私たちを支えているのかを伝えたり、子どもを育てる側の大人が消費とは違う楽しさを感じられるように工夫したりしながら、保育の「真」を柔らかく死守する知恵と技が必要になつていて。それが遠く保育に關係がある、子どもにも大人にも共通する世界が私にとって必要な一つの理由である。

子どもたちのことを語り合う場は、大人が子どもたちにとってのよりよさを考え合う場である。子どもたちにとってのよりよさとは、子どもが自分を好きになることであつたり、周りの人と一緒に生活しやすくなることであつたりする。それがなぜより

よく育つことにつながるのか、何を大切にすることが子どもたちが未来に向かって人としてよりよく育つていくことになるのかを語り合うことは、私たちが大人としてこの時代をどう生きていくことをよりよいと考えているのかと切り離すことはできない。子どもに対する「保育者」としての存在だけでなく、今の時代を生きる大人としてどのように生きているのかが問わることになる。現代の社会で個人として消費することに終始せずに、個だけで完結しない楽しさや豊かさを求めていく大人としての姿勢と、それらを実際に子どもたちと共にすること、伝えていくことが保育者に求められているのだと思う。それは保育者養成を仕事とする者として、学生を育てながら思うことでもある。乳幼児の発達や保育の世界のことを知るだけでは、その場その場で子どもに対応する術は身についても、子どもたちへの長期的なスパンでのビジョンをもつことはできない。遠く保育に関係がある世界に開かれていることは、私たちが時代の変化にただ流されているのではなく、希望をもつて未来をつくりしていく仲間として子どもたちにまなざしを向けることができる人になるためにも、私にとつて必要なことがある。

『幼児の教育』が、これからも保育の真を核としながら、子どもたちと未来をつくつていく者たちにとつて希望を見いだせる雑誌であり続けますように。

(大妻女子大学児童学科)